

デュルケームとナショナリズム、コスモポリタニズム

—現代との応答—

神戸大学 白鳥義彦

1. はじめに

デュルケーム(1858年-1917年)が社会学者として研究を進めていったフランスには、普仏戦争(1870年-1871年)におけるフランスの敗北の後、「祖国の再建」が求められていたという大きな時代背景を見出すことができる。例えば1894年に起こったドレフュス事件は、その「祖国の再建」をいかなる形で、どのような方向をもって進めていくべきかということについての、社会的・政治的な緊張が具体的な形をとって現われたものとしてとらえることができよう。一般的にデュルケームは、現実の政治的動向からは一定の距離をとりながら自らの研究に取り組んでいたととらえられることが多いが、ドレフュス事件に際しては「人権同盟」においてドレフュス派としての活動を行っていたことが知られている。またこの時期にデュルケームは、教鞭をとっていたボルドー大学において国家についての講義を行っており、その内容は『社会学講義』(Durkheim, 1950=1974)に見ることができる。一方デュルケームの晩年にあたる1914年には第一次世界大戦が勃発し、フランスは再びドイツと戦火を交えることとなる。

本報告では、デュルケームの生きた時代、また彼自身の問題関心にこのように見出される「国家」の問題を背景としながら、ナショナリズムとコスモポリタニズムという論点に注目して考察を行い、さらにそれをデュルケーム自身による「道徳」の議論と関連づけた上で、その現代的意義ならびに現代の議論との応答を試みたい。

2. デュルケームの国家論

ここではまず、『社会学講義』を中心に、デュルケームの国家論を整理しておきたい。デュルケームによる国家論に見出される特徴的な視点として、「なによりもまず、すぐれて道徳的規律のための機関」(*ibid.*, 106=109)として国家をとらえる彼独自の観点を指摘することができる。これは例えば、正当な物理的暴力の独占、といった観点から国家を考察していこうとするマックス・ヴェーバーなどとは大きく異なる視点である。そしてデュルケームは、このように道徳的な観点から性格づけられる国家を、「思惟の機関」としてとらえ、「国家とは、集合体にとって有用な一定の表象の形成を任務とする特別の機関である。……固有の意味での国家の生活は、すべて、外的な行動や運動としてではなく、熟慮として、つまり表象として営まれる。運動に携わるのは別のもの、つまりさまざまな種類の行政官庁である。……国家とは、厳密に言えば、社会的な思惟の機関そのものである」(*ibid.*, 87=84-85)と述べている。そして、彼自身、例えば第一次世界大戦に際しては対戦国ドイツに対する自国フランスの擁護という立場から、『世界に冠たるドイツ—ドイツ人の精神構造と戦争』(Durkheim, 1915a)や、『誰が戦争を欲したのか—外交文書に基づく戦争の起源』(Durkheim, 1915b)を刊行する一方で、「実際、フランス文化を他のすべての文化の上位に置くことは、……ナショナリストの言葉を話すことではないでしょうか。……もし、フランスをすべてのものの上位に置くことによってしか愛国心を育成せざるを得ないとすれば、それは悲しむべきことでしょう」(Durkheim, 1908:300=1988:237-238)という言葉にも示されるように、偏狭なナショナリズムからは距離をとろうとしている。

3. 愛国心とコスモポリタニズム

デュルケームはまた、愛国心とコスモポリタニズムとの関係に注目し、次のような論を展開している。まず、人間や社会についてのデュルケームの基本的な認識には、人間が道徳的存在であるのはその個人が社会のなかにいるからこそである、というものがあるが、そうした前提のもとで彼は、「個人をある特定の国家に結びつける観念や感情の総体」である愛国心ほど、これに適

する望ましい絆を備えた道徳的権威はないととらえる。さらに国民的理想と人間的理想とが一つになるならば、「われわれを国民的な理想に、またこの理想を体現する国家に結びつける感情」である愛国心は、「われわれを人間的な理想に、また人類に結びつける感情」であるコスモポリタニズムへとつながっていくことが可能となると考えている。なお、一つの理論的な解決としての、人類自体が一つの社会へと組織されるという考え方については、デュルケームは、完全に実現不可能ではないにしても、きわめて不確定な未来に押しやられるべきものであるから、真剣に考慮に入れる余地はないと主張する。この点について彼は、「中間項として、現に存在する社会よりも大規模な社会、たとえばヨーロッパの諸国家の連邦を考えたとしても無意味である。より大規模な連邦自体が、独自の個性、独自の利害、独自の特性をそなえた個別の国家となってしまう。それは人類ではあるまい」と述べている (Durkheim, 1950:109-111=1974:109-111)。こうした考え方は、今日の EU のあり方を想起するならば、興味深い論点を提起すると言えよう。

4. 道徳教育の三要素とナショナリズム

このような愛国心やナショナリズムをめぐる議論は、「道徳」をキーワードとして有していることから、『道徳教育論』(Durkheim, 1925=1964)で示されている、規律の精神、集団への愛着、意志の自律性という、道徳教育の三要素に関する考察と関連づけることが可能である。デュルケームにおいて「道徳」は、単に観念的なものとしてではなく、具体的な社会集団を前提とし、それを抛りどころとしてとらえられているが、その意味で彼は、実体的な最大の社会集団として国家をとらえ、これに個人を結びつける愛国心を「望ましい道徳的権威」と位置づけたのであった。

しかしデュルケームにおいては、集団への愛着ばかりでなく、意志の自律性も同様に道徳教育の要素の一つとして挙げられている点もまた注目される。このことはデュルケームが、絶対的に優越的なものとして国家の価値をとらえているわけでは決してないことを示唆するであろう。そもそも彼は、道徳的個人主義・人格の崇拜という形で示されるように、個人の価値をも重視していたのであり、その実現のために国家が果たすべき役割をも強調していたのである。

5. おわりに

デュルケームは道徳的側面からの国家の役割を認めつつ、同時に個人の価値をも重視しようとしていた。また個人の存在に対する愛国心やナショナリズムの支えに注目しつつ、それが偏狭なナショナリズムとなることは拒否した。こうした視点からは、今日の日本における「道徳」の教科化、東アジアにおける状況などといった諸問題に対する示唆を得ることができる。また例えばデュルケームによるコスモポリタニズムの議論を、近年のウルリヒ・ベックによるコスモポリタン化の議論などと関連づけることによって、現代との応答を試みることも、興味深い論点となり得るであろう。

引用文献

- Durkheim, Émile 1908 “Pacifisme et patriotisme”, dans *La science sociale et l'action* (1970, 2^e éd., P. U. F., 1987), p.293-300.=1993 佐々木交賢・中島明勲訳「平和主義と愛国心」、同訳『社会科学と行動』恒星社厚生閣、pp.232-238。
- 1925 *L'Éducation morale* (nouvelle éd., P. U. F., 1969). =1964 麻生誠・山村健訳『道徳教育論(一・二)』明治図書(同訳『道徳教育論』講談社学術文庫, 2010)。
- 1950 *Leçons de sociologie : physique des moeurs et du droit* (2^e éd., P. U. F., 1969). =1974 宮島喬・川喜多喬訳『社会学講義—習俗と法の物理学』みすず書房。
- 1915a *L'Allemagne au-dessus de tout : La mentalité allemande et la guerre*, Armand Colin. =1993 小関藤一郎・山下雅之訳「世界に冠たるドイツ—ドイツ人の精神構造と戦争」、同訳『デュルケームドイツ論集』行路社、pp.217-262。
- 1915b *Qui a voulu la guerre? Les origines de la guerre d'après les documents diplomatiques*, Armand Colin.